

コロナ禍における授業実践について

江口, 巧
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/6779650>

出版情報：英語英文学論叢. 73, pp.37-42, 2023-03-17. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



コロナ禍における授業実践について

江 口 巧

新型コロナウイルス感染症の流行が日本で始まってから、早3年の歳月が過ぎた。現時点では、当初予想もしなかった第8波に至るまで流行が続いており、行動規制等はかなり緩和されてきたとは言え、一体いつまでこのような状況が続くのか、まだ予断を許さない状況である。

感染が広まり始めた令和2年3月時点で、国内の各教育機関は最大級の警戒態勢に入り、学生及び教員に一人の感染者も出さない覚悟で、新年度の教育方式を本来の対面式から遠隔式に転換する方針を打ち出し、九州大学においても教員に遠隔授業の準備期間を与える意味で、5月の連休明けを授業の開始時期に設定した。私が非常勤講師として勤務する福岡県内の私立大学においても同様の対応策が取られた。

以下は、私がこの準備に要した体験談、遠隔授業を実践した報告、および遠隔授業に感じた問題点などを綴ったものである。

私は他の教員と比べて、いわゆる ITC（Information and Communication Technology）の分野に通じた人間ではなく、大学から遠隔授業に使用するシステム Moodle のマニュアルや動画が公開されてからは、それをひたすら繰り返し読んだり見たりする日々が続いた。もちろん、それまでの教員生活で、授業で使用する媒体そのものの準備にこれほどの期間を要したことはなかった。授業開始まで与えられた約1か月余りも決して長いとは感じられず、むしろ焦りを感じる日々であった。

そしてこの期間忘れもしないのは、大学がコロナ感染防止のため、出勤を慎むことを奨励する方針を打ち出したことである。もちろんこれはやむを得ない措置であることは理解する。しかし、この期間、自宅での業務を“半ば強制”されるような形となり、大学に顔を出す同僚教員や事務職員の数もめっきり減った。私にとっては、教育・研究の関係資料をほとんどすべて大学の研究室に置いていたことと、携帯用のノートPCを所有していなかったため、在宅業務はほぼ不可能であった。そのため、大学で業務を続けざるを得なかったが、この頃、大学に出てきて事務職員の方に姿を見られた時に感じる後ろめたさや罪悪感はどう抑えよ

うもなかった。そして同時に、研究棟の同じ階で照明が灯った他の教員の研究室を見ると同心の意識が生まれ、大いに心強さを感じたものである。しかし、この頃の気持ちを同僚に話そうにも、学内に同僚はおらず、またいたとしても接触はためらわれ、ぼやきは帰宅後に家族に聞いてもらうしかなかった。

さて、遠隔授業準備の苦労談に戻るが、遠隔授業用に用いるシステムは九州大学と非常勤先の大学で異なっており、同時に両方のシステムの使用法を修得しなければならなかった。また、遠隔式で具体的にどのような形態で授業を行うかについての判断は、各教員にゆだねられた。ただし、ライブ式の遠隔授業という形態については、大学全体として多量のシステムの容量を消費してしまうという点と、学生の自宅でのネット環境が必ずしも整備されていない可能性があるという理由で推奨されなかった。そこで、決して先進的ではないが、私は学生に授業の要点を記したパワーポイントのファイルを作成した上で Moodle で提示し、また、授業ごとに課題を提出させるという形態を取ることにした。少しでも学生の理解が深まるようにと、パワポファイルに音声をつけることも試みたが、ファイルの容量が予想以上に大きくなり、結果的に断念することになった。

あれこれ試行錯誤を繰り返しながら、準備期間はあっという間に過ぎ、いよいよ授業開始となった。個人的な苦労はあったが、準備期間の間に、部局で独自に Moodle の使用法に関するマニュアルが制作・配布されたことは、本当に助け舟となった。これらを頼りとしながら、自分で決めた授業実施の形態に関してはできる限りの準備を尽くしたので、ある程度自信をもった形でのスタートとなった（それでも、Moodle 上での課題提示のやり方に関しては、学期中に成功と失敗を繰り返すこととなった）。

以下、この形式での遠隔授業の実施に関して感じた問題点を述べておこう。

学生からすれば、当然対面式での授業を受けることを前提として大学に入学してきたであろうから、このような形態で授業を受けることになったことによる困惑は大きかったものと予想される。しかし、国内全体がこのような事態になった以上は、学生側もこれに対応した学習を行うことが求められる。遠隔授業が始まった当初、私は他の教員と授業の

実践に関して情報交換をしていたわけではないので、他の教員がどのような遠隔授業の形態を採っていたのかはわからない。しかしひとつ明らかであったのは、実験・実習等を除いた通常の授業では、学生は基本的に大学に出向いていないということである。つまり、自宅学習が基本である。従って、自宅という大学の講義・演習には本来ふさわしくない環境にありながらも、それに適応することが求められた。まず、これが学生にとっての大きな試練であったと言える。

学生にとって、Moodle 上で提示されたファイルをテキストとともに参照しながら学習することは、教室で直に教員の説明を聴きながら学習することに比べれば、かなり根気を要するものであろう。また、学習効果という点においても非効率的と言えるかもしれない。そして、このような形態の授業はいわゆるオンデマンドという形を取ることが多く、この方式では学生は自分にとって都合のいい時間を選んで学習すればよいとされる。しかし、学生が自分で組んだ時間割に沿って受講する多くの授業がこのようなオンデマンド式で提供されると、結果的に学生は限られた時間で受講する授業が集中し、手に負えなくなる。そこで、理想的には正規の授業時間中にそれぞれの授業の学習をこなし、ひとつひとつ消化していけばよいのだが、実際には、上に述べたような根気を要するこの授業の性格、および自宅という緊張感に欠ける環境からして、学習を先延ばしにしてしまうことが懸念される。そして、こちらの予想通り、学生の学習ペースは本来たどるべきペースから徐々にずれていった。Moodle では、教員側はこちらが提示した授業資料を学生が参照した日時をシステム上知ることができる。そのデータを調査してみると、正規の授業時間から何日も経過した後でファイルを参照するケースであったり、ひどい場合には、1 週間丸々あるいは期末試験の直前まで参照しないというケースも散見された。

新型コロナ流行初年の令和 2 年度は前後期ともすべて遠隔式での授業であったが、令和 3 年度前期は流行が落ち着き、対面式でのスタートとなった。しかし、しばらくするとまた流行が拡大し、学期途中から遠隔式となった。そして 7 月に入り、再び対面授業が再開された時、数か月ぶりに教室で学生と顔を合わせて授業を行い、それまでは当たり前と思っていた対面式の授業が、教員にとっても学生にとっても、いかに教育上効果があるものかを実感することになった。Moodle 上で授業の要

点を記したファイルを学生に提示するとしても、それは内容を伝える一媒体としての文字にすぎず、どれも一律様の顔をしたメッセージである。しかし、対面式授業では、口頭による伝達のため、短時間で多くのメッセージを伝えられ、幹の部分に枝葉をつける余裕が生まれる。かつ、話すリズムにめりはりがつけられるため、学生の側としても話のポイントがつかみやすい。教室で私の授業を聴いている学生の反応にも手応えと満足感が読み取れた。まさに、当たり前でない状況に遭遇して初めて、当たり前であることのありがたさを知るとはこのことである。

私の行う遠隔授業のスタイルでは、こちらからのファイルの提供だけでは学生側の学習を保証することにならないため、学習効果を確認する意味で、授業ごとに課題テストを作成し、Moodle 上で数日以内の提出を求めた。しかし、この方式のデメリットとして、教室でのいわゆる小テストとは異なり、学生は解答の提出までに他の学生と連絡を取り合うことも可能となる。ほとんどのクラスでは「自力で解答すること」というこちらからの注意書きに忠実に従い、概ね平均点は7割程度という正答率であった（問題を作成する側としても、概ねその程度の正答率を念頭において作問をしている）。ところがある一つのクラスに限って、どんなに難しいと思われる問題を加えても、3～4回テストを実施した段階で、ほとんどの学生が満点ということがあった。さすがに不自然だと思われる、それから「問題の解答においては他の学生と連絡をとりあうことを禁止する。違反した学生は失格とする」という文言を添えたところ、以降そのクラスでは、平均正答率が7割程度に落ち着いた。また、遠隔式で実施したある期末テストでは、ある設問に対し、非常に奇妙な解答を書いている学生がいた。しかしさらに驚いたのは、この解答と一字一句同じ解答を書いた別の学生がいたことである。おそらく、試験前に連絡を取り合って、設問ごとの解答を分担し合い、後に解答を共有し、コピー&ペーストしたものと思われる。

上のケースが示唆するように、遠隔式でのテストの実施にはさまざまな問題があり、教員側にとっては、この形式のテストをどのように実施するのかということが大きな課題となる。遠隔式のテストでは、教員は基本的に受験状況を監視できないので、学生は何らかの手段で相互に連絡を取り合うことができるばかりでなく、試験時にテキストや Moodle で既に提示されたファイルを参照することも可能になってしまう。ま

た、PCを使用するため、解答の際ネットを検索することも十分に考えられる。従って、そのような状況の下、「テキストも授業ファイルも参照してはいけない」という指示を出すことは現実的ではない。むしろ教員側は、そうした行為をすべて許可するという前提で問題を作成する必要がある。このような制約のもと、学生の実力を正しく査定し、かつ1学期間着実かつ誠実に学習を行ったかどうかを評価する試験問題を作成することはかなり至難の業である。通常の試験問題作成に比べ、倍近く気苦労を要する作業となる。個人的見解として、大学側（基幹教育院や教務係サイド）にはこのことを理解していただきたい。令和3年度後期は、学期開始当初から順調に対面式授業が行われたが、正月明けから国内のコロナ感染状況が深刻化し、期末テストまで数週間というタイミングで、大学側から対面式授業からの切り替えの検討を行うようにという指示が出された。その時期、予想はしていたこととはいえ、担当していた学術英語プロダクション2の授業では学生に英語でのプレゼンテーションを要求しており、また、既に学生の3分の1くらいはプレゼンを終えていたこともあり、大学側からのこのような指示には幾分戸惑いを覚えた。そこで、何とか可能な道はないものかと探り、その後の授業にはその週プレゼンが予定されている5～6名の学生だけを教室に集め、十分に間隔を空けた形でプレゼンを行うという対策を考えた。そして、期末テストについては、先に述べたような事情もあって、学生の英語の正当な実力を見るため、教室で行うことを考えた。そしてこのことを教務係に相談したが、その際、最終的に授業や試験の実施形態を決めるのは教員側の判断であるが、何か事が生じた時には教員の側が責任をもつよう釘をさされた。この言葉が自分の胸に響き、結局私が考えた方策は最初の1週間だけの実施となり、その後は、教務係の指示に従い、教室でのプレゼンおよび期末テストの実施を断念することになった。大学側が出す指示はもっともであり、十分に理解できる。しかし、同時に、教員側が抱える悩みもいくらかなりとも理解していただきたかったと思っている。

これまで、遠隔授業がもたらす弊害を、それを実践してきた私なりの観点から述べてきた。もちろん他の教員の中には私とは違ったやり方で遠隔授業を実施した教員も多いと予想され、令和3年度には、部局内でそのような授業の実践方法を紹介するFDも開催された。そこでは、遠

隔授業のメリットをうまく活用した授業も紹介された。しかし、総合的な観点から見ると、対面授業に一部オンライン式のシステムを取り入れる方法もあるだろうが、私自身、やはり対面式授業に勝るものはないと考えており、これまでの対面式授業でもし不十分な点があれば、その改善を模索しながら対面式授業を充実していきたいと考えている。その意味で、昨年12月に、令和5年度は基本的に一層の対面授業の徹底を図るとの意向が大学側から示されたことは歓迎すべきことだと感じている。

3年前のコロナの流行は、上に述べてきた授業に限らず、他の様々な面でも悪影響を及ぼしてきた。学内での会議もほとんどがZoom等によるオンライン式に切り替わった。しかし、会議や行う業務の性質によっては、対面式の方が顕著に効果的と思われる事例は多い。例えば語科で行う教務関連の作業についても、本来なら同じ場所で資料を共に見たり、作業方法を共有し、わからない人がいれば直に手取り足取りで教える、また難しい問題点については頭を突き合せて解決法を考え、意見交換するといった機会が奪われていると感じる。こうしたことから、同じ系のメンバー全員が作業方法を共有しあうということが難しくなっている。遠隔式の会合がもたらす深刻なデメリットである。

いったん収束したかと思うと、すぐにまた新しい株を進化させ、なかなか消滅する気配を見せない新型コロナウイルスであるが、上述の会議や諸業務にもたらす悪影響と合わせ、学生が本来享受する権利のある充実した学習機会を確保する意味でも、今後一刻も早い収束を願うばかりである。